

金田勝徳 プラス・ワンの堅実

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco◎Switch・エンタテインメント

■今日は昨日より!

構造計画プラス・ワンを設立して27年。長い年月に造った名刀のような実績は、私たちの知るところです。代表の構造家・金田勝徳は、技術の自由と規律を重んじる。そして軽快なフットワークで、どんな現場も自ら体感することを課す。「この揺れは問題ない」の言葉に、安心した日を思い出します。

「一寸遅かったと言えたかも知れないが」とは、独立した年齢。石本建築事務所では居心地よく働いていたが、最後の3年間くらいは管理職で生きるかを模索して悩んだ。「マルチ人間と評価されてしまって……フフ」意匠設計も仕切ることになってしまっていたのですから。そして結局、構造設計の魅力と現役技術者としての未練が、冒険を決断させたという。ところが、すぐさま独立したのではないところが、金田勝徳先生たる所以。TIS&PARTNERSでの修業の2年間がある。「事務所経営と石本さんスタイル以外を学ばれたのですね」と、経緯をよく知る覇志堂が言うのでした。

■張弦梁と硝子

酒田市国体記念体育館（設計：谷口建築設計研究所）で、斎藤藤公男先生と張弦梁構造に挑み、第4回JSCA賞を受賞。「きちんとした建築家がやると張弦梁は奇麗ですよ」と言うのは、建築家・谷口吉生と造った数々の仕事からきた言葉だろう。言外には諸建築家に対して、奇麗な建築を設計してほしいという思いが込められる。

豊田市美術館の外壁のこと。当初は外壁が透明硝子で設計されていた。先生は「鉄骨の構造体が見える!」と、先生は構造デザインをとっても張り切ったそう。しかし、建築家の鶴の一声で、乳白硝子に変更となってしまいます。「とてもザンネンでした～。たとえ構造が隠れてしまっても、美しい建築なので慰

められましたけどね……」。リベンジの機会は、建築家・山本理顕設計の横須賀美術館が運んでくれた。構造が見える透明硝子の外壁に「おう、やったぞう」と嬉しがった先生なのでした。金田勝徳先生にこんな一面があるとは……、キュート。

■コロブスの卵

建築家・北山恒氏と「洗足の連結住棟」で2010年第62回日本建築学会賞を受賞された。

それまでにない壁式のシステムの発想は、「コロブスの卵だった」とおっしゃる。閃きと、最初にやる勇気の賜物であるのは、間違いないでしょう。

建築家がコスト管理をしなければならないと、はっきり語る先生は頼もしい。「無駄なお金をかけることに、どんな意味があるのか。見て気持ちがよく、安全な建築物を現実的に考えてほしい。設計者は早い段階で施工者と組んで、コスト管理をするべし、施工図で設計するなども。おそらく、若い建築家たちに柔かくアドバイスされていることだろう。

■バトンを渡す心得

ホンダ技研の創業者である本田宗一郎は、自分の名前を社名に入れたことを唯一の失敗と言った。経営哲学を本田から学ぶ金田先生は、そこを反面教師にした。社名はプラス・ワンに。そして、大事な一つ、姻戚関係に経営のバトンは渡さないとも、創業のときに決めた。実は斎藤公男研究室で学んだ子息が、構造技術者として大手ゼネコンに勤務しているが、その考えは変わらないという。

「懸案中の新本はプラス・ワン創立30周年記念には、間に合わせましょう!」と一押しした覇志堂。「一年ごとに処理能力が遅くなって時間がなくなる……」。初めて聞く先生の分析に、笑いで幕を閉じたのでした。

